

## つくばね vol.28no.3

## 目次

- 1 図書館情報学図書館について
- 4 自著を語る
- 6 図書館情報大学実習生 実習体験記
- 7 本学教官寄贈著書紹介
- 8 私の一冊
- 9 Ask Us としょかんミニガイド
- 12 とびつくす
- 13 掲示板

## 図書館情報学図書館について

寺田 光孝

図書館情報大学附属図書館は、統合により筑波大学附属図書館図書館情報学図書館となった。文字通り図書館情報学の専門図書館である。

この図書館は、昭和54年10月図書館情報大学の創設とともに附属図書館として昭和55年5月、教室の仮室で出発し、研究棟が完成した翌年、研究棟と講義棟を結ぶ位置の現在の場所です。本格的に開館を見た。小さな大学の小さな図書館であったという事情にもよるが、研究室に、また教室に直結した場所に図書館をとというのが理念でもあった。

設立時の第一次資料整備計画では10万冊を目標に、最終的には20万冊を目標に蔵書構築が始まった。昭和56年3月に図書館短期大学図書室の蔵書約3万3千冊の移管を受け、毎年約7～8千冊の増加で成長し、平成12年度に目標数値に達し、今時の統合時には約21万冊の規模となっている。

## 1 図情図書館の機能

図情図書館の機能について、若干歴史的経緯に触れつつ、先ず述べてみよう。この図書館は学部



プリントメディア部門のある建物外観



情報メディアユニオン全景

デジタルメディア部門は1,2階

学生・研究者を対象とする通常の図書館機能のほかに、図書館情報学の実験演習の場としても位置づけられて出発した。演習室・実習室が図書館の管轄下に置かれ、目録・分類、レファレンスサービスの演習に使用されてきた。また図書館情報大学は筑波大学と同じく「開かれた大学」を建学の精神とし、昭和56年度以来、文部省（現文部科学省）委嘱の夏期の司書講習、文部省共催の大学図書館職員長期研修が毎年開催され、さらに平成9年度以降文部省委嘱の学校図書館司書教諭講習、平成10年度からは文部省・日本図書館協会共催の新任図書館長研修が行われている。大学図書館職員の長期研修、司書教諭講習が図書館の所掌である。

当館の開館当初には特殊施設として図書館情報システム開発センター、メディア機器センターが付置され、システム開発センターでは図書館業務機械化システムLIAISONを開発し、機器センターでは資料のマイクロ化などに当たっていたが、平成3年に両センターが統合し、省令施設「総合情報処理センター」となった。平成8年にセンターの新棟が完成し、10年にデジタル図書館システムが導入され、翌年に稼働するようになった。デジタル図書館では図書館情報学と情報メディア研究の分野のメタデータを作成し提供している。この間、平成4年マルチメディアネットワークシステムBIBLIONによるOPACの公開や学術情報センターのILLシステムも運用を開始している。

特殊施設にもう一つ公開図書室があった。当時の谷田部町、桜村には住民のための図書館がなかったからである。火・木・土の午後開室のみであったが、成人用と児童室があり、特に土曜の午後は盛況であった。この図書室はまだボランティアによる運営がそれほど一般的でなかった頃、学生と地域住民のボランティアで運営された。つくば市の誕生と市立図書館の開設でこの図書室は平成2年12月に閉室となるが、児童部門のみは演習の場として機能しつづけた。

平成13年に情報メディアユニオンULISの新棟竣工により、図書館はデジタルメディアの利用、

電子情報の作成・編集等の機能を中心とした「デジタルメディア部門」と旧来の図書館を「プリントメディア部門」とした2つの部門に分かれた。デジタル図書館については、統合とともに「知的コミュニティ基盤研究センター」が生まれて、こちらに移ったが、今後図書館との緊密な連携で運用されることになる。

## 2 資料整備計画と大型コレクション

今日の図書館はストックとしての情報を収集し利用するのみでなく、大量のデータベース、ネットワーク上のフローの情報をも扱わざるをえないが、図書館の主機能はストックの情報を集積する場であることに変わりがない。当館では、開学時の第1次資料整備計画に加え、昭和62年度からの第2次資料整備計画、そして平成9年度から第3次資料整備計画（進行中）と3次にわたる予算措置の結果、全国の図書館情報学の拠点図書館として専門書の収集を着々と図ってきた。さらに、文部省の大型コレクションによる予算措置も度々認められてきた。「NTIS研究レポート：図書館情報学篇 1968 - 1976」（昭和55年度）、「ロシア・ソ連書誌、図書館学資料集成」（56年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1938 - 81」（57年度）、「英国図書館研究開発部レポート集成 1965 - 1983」（58年度）、「印刷・製本・出版関係コレクション 1764 - 1982」（59年度）、「百万塔陀羅尼（自心印）」（60年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1981 - 85」（61年度）、「シカゴ大学図書館情報学関係学位論文集成 1931 - 1990」（平成3年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1986 - 1990」（3年度）、「同 1991 - 94」（7年度）、「同 1995 - 98」（12年度）である。アメリカの学位論文については1998年まですべて網羅されている。平成13年度にはバンクックの『系統的百科全書』（全200冊）も認められた。

雑誌は、図書館情報学関係の雑誌を網羅的に受け入れる方針で始まったが、パブル崩壊後見直し作業がつづいた。継続購入受け入れタイトル数の変化がこのことを語っている。洋雑誌の場合、昭

和57年度の480種であったものが昭和61年度には337種に絞り込まれ、平成12年度には306種にまで落ちている。書誌関係の雑誌がCD-ROMなどに媒体変換したことも一因であるが、それ以上に財政事情によるところが大きい。電子ジャーナルの出現などから、統合を契機に、今後も見直し作業は避けられないところである。

### 3 特殊コレクションと貴重書

大型コレクションを除くと特殊コレクションはそう多くない。目録法関係の「高橋泰四郎旧蔵文庫」と書誌学・言語学関係などの「笠木文庫」の2つである。いずれも図書館講習所時代の修了生の旧蔵のものである。単著では加藤宗厚の手沢本やランガナタンのサイン入り本がある。今年になって大学図書館行政関係の馬場重徳文書も入った。

当館が誇る蔵書の最大の特徴は百科事典類の集書である。Ephraim Chambersの『サイクロペディア』（初版、7版、7版補遺）、『ブリタニカ』は初版から第15版まで、すべて揃っている。Morériの『歴史事典』の最終版（1759）、Bayleの『歴史批判事典』（第3版と英語版）、『トレヴーの百科事典』（1771の最終版）、Diderot et D'Alembertの『百科全書』（全35巻）、Panckouckeの『系統的百科全書』（この事典の全巻所蔵は当館が本邦で唯一である）、ラルースの『19世紀大百科事典』と『20世紀大百科事典』、Augéの『新ラルース挿絵入り事典』など、またFuretièreの『万有事典』の復刻版などを入れると、まさに百科事典の宝庫であると云えよう。

書誌類もまた充実している。網羅的にはほど遠いが、C. Gesnerの『世界文庫』の復刻やDe Bureの『教養書目』のオリジナルなどを含め、図書館目録や販売書誌まで書誌類の蔵書の層は厚い。

単著では、ゲーテンベルク聖書の「エゼキエル書」の一葉やインクナーブラの1冊などメディア媒体・印刷・文字に関するものなどサンプル例として数多くのものが収集されている。特に和書・漢籍の場合はこの例が多い。17世紀の初期雑

誌もこの例であるが、“Journal des sçavans”，1666 - 1722 .はオリジナルで、“Acta eruditorum”，1682 - 1776 .もマイクロフィッシュで入っている。

情報メディアユニオンの新棟の完成によって、デジタルメディアを使用するスペースであるマルチメディアプラザ、メディアミュージアム（展示コーナー）と貴重書庫並びに演習に使える貴重書閲覧室ができた。貴重書は蔵書の核であり、図書の森の巨木に喩えられよう。この蔵書の核を作るために、貴重書購入の予算枠の仕組みを3年前からつくったが、この方針は堅持したいものである。

（てらだ・みつたか 図書館情報学系教授）



『文献足徴』[扁額は図書館情報学図書館で保存]（今澤慈海の揮毫による前身校図書館室に掲げられていた扁額。氏は戦前の日比谷図書館黄金期の館頭、戦後は成田図書館長として活躍した代表的な図書館人である。文部省図書館員教習所の設立功労者の一人であり、長年講師を勤めた。）

